

Part 1

N：やあ、ミランダの明日の予定を知りたいんだ。

A：分かったわ。入って。

N：誰がコーディネートしたの？

A：これ？自分で適当に合わせただけよ。

N：来て。ん〜、回って。素晴らしいね。本当に、

A：そう？

N：美しいよ。本当さ。私の役目は終わったな。

A：おお。

N：お祝いだ。シャンパンを持ってくるよ。

A：いいわ。何に乾杯するの？

N：夢のような仕事に乾杯するのさ。大勢の女性が就きたい仕事だ。

A：数カ月前に手に入れたものね。

N：君のことじゃないよ。

A：ん？

N：ジェームズ・ホルト。

A：ん？

N：マッシモ・コルテリオーニがジェームズの会社に投資して世界市場に進出するんだ。

A：うん。

N：バック、靴、香水。全てやっているんだ。そしてジェームズにはパートナーが必要だ。そのパートナーは私になる。

A：ミランダは、

N：いやいや、ミランダは知ってるよ。彼女の推薦だからね。まさか。でないと、

A：でもでも、辞めてしまうのね。あなたのいない Runwayなんて想像できないわ。

N：分かっている。でも、すごく興奮してるんだ。18年ぶりに自分の人生を変えられるんだ。すごいよ。パリにまた来れるし、その時は本当にパリを満喫できる。

A：とにかく、おめでとう。ナイジェル、苦勞が報われたわね。

N：その通りだよ。サイズ6。

A：サイズ4よ。

N：本当？

A：乾杯。

N：君に乾杯。

A：私たちに。

N：うん。

PART 2

A: ええ、確かにミランダのやることは同意できないことはあるわ、でもー

C: おいおい、君は彼女を嫌ってるんだろ。認めろよ。

A: ちがっ・・・

C: 彼女は有名なサディストだ、悪い意味で

A: 彼女がキツイのは確かよ。でももし彼女が男だったら、仕事ぶりが有能であること以外、誰も気にしないわ

C: ゴメン、信じられないな。彼女を弁護するとはね

A: ええ

C: マジメな記事を書り込んでた重水な彼女が？

友よ、ダークサイドに飲み込まれたな

A: ハラたつわね

C: 怒るなよ、セクシーだよ

A: セクシー？ ホント？

A: ホント

Part 3

A：どこに向かっているのかわかる？だって、、、

C：大丈夫だよ

A：私はわかんないよ

C：心配しないで、僕はこの街を自分の庭のようにしているんだ。

ここは世界で一番好きな場所なんだ

ガートルード・スラインはかつて「アメリカは私の国であり、パリは私の故郷である」と言っていたんだ。本当だよ

A：あなたの仕事って？そんなものを書き留め、ファイルにして、私たち女の子向けの記事にするの？

C：僕はクリスチャン・トンプソンだ、これが僕のやり方だ。

A：それがあなたのやり方なのね、なるほど

C：僕はフリーランスだから自由な時間がたくさんあるんだ。

A：なんでみんながパリに夢中なのか私には理解が出来なかったけど、、、

素晴らしい街だ

ダメだ、ごめんなさい、ダメなの。ネイトと数日前別れたばかりだし、、、ああ、ワインを飲みすぎてよく聞こえないし、見えないし、頭もうまく働かないよ。

私はあなたのことをほとんど知らないし、見ず知らずの街にいるのにもう言い訳は尽きたわ

C：良かった。

PART 4

A：よし

C：おはよう

A：お、おはよう。 これって、、？

C：何に見える？見本だよ。

A：何の？

C：ジャックリーンがアメリカ版ランウェイの編集長になったら
こんな感じになるっていう見本だよ

A：ミランダをやめさせるの？

C：うん、それで私は読み物部分を担当するようになるの。

驚いた？（ジャックリーン）ミランダよりずっと若いし。

彼女は新鮮な見方が出来る。

アメリカ版ランウェイは雑誌業界で高くついてろの。

ジャックリーンなら経費削減しても同じことが出来る。

しかもアープは経営者だからね。

A：ミランダ失望するわよ。ランウェイは彼女の人生そのものです。

（アープに）そんなことさせてはいけない。

C：もうしたよ。アープはジェームズのパーティーの後に伝える

A：じゃあミランダは何も知らないんですか？

C：彼女は偉大だから。大丈夫。

A：はあ、、行かなきゃ。

C：アンディー、アンディー、もうしたよ。ベイベーもうしたよ。

A：私はベイベーじゃない。

PART 5

M：もしもし？

A：よかった、ようやく繋がった！

M：なんですって？

A：今すぐジャックリーヌについて話すことがあります、彼女が、、、まったく何なの！

R：はい？

A：こんにちは、ご迷惑をかけて申し訳ないのですが、もしかけたら、、、

M：ついに頭おかしくなったの？

A：ミランダお話があります

M：二度と邪魔をしないで

A：でも、、、ちょっと、、、

A：ミランダ、待ってください

お話があります、アーヴが *Runway* の編集長をジャックリーヌにしようとしています、
そして、クリスチャンがその下で働くと言って、
アーヴは今日あなたに伝えるつもりです。

ですがこれを伝えれば、あなたが解決できると思って

M：ねえ、フリージアの匂いがしない？

A：え？、、、使わないように業者には指示をしています

M：もし、フリージアを見つけたら、私はとってもがっかりするわ